第４節　中世大友府内町跡
第67次調査Ａ区(J・K-20～24区)

1　調査の概要

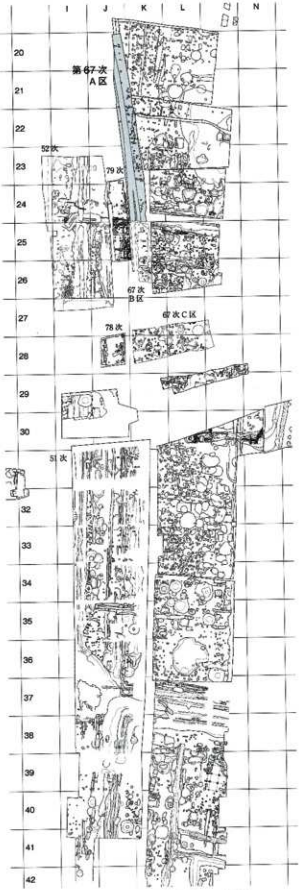
中世大友府内町跡第67次調査Ａ区は大分県大分市元町に所在し、標高約4.5ｍの沖積低地上に立地する。中世大友府内町跡は、大分県教育委員会が1993年に刊行した『大分県遺跡地図』において「中世大友城下町跡」の名称で登録されていた周知遺跡である。また、1987年に大分市史編さん委員会が作成した「戦国時代の府内復元想定図」によると、当該調査区は豊後府内のメインストリートである第２南北街路付近と大友氏館跡の東側に位置する「桜町」の一部に相当することが推定された。

本節で報告する第67次調査Ａ区（第312図）については、一般国道10号古国府拡幅事業に伴って国土交通省大分河川国道事務所からの委託を受け、2006年（平成18年）５月８日～６月１日までの約１箇月間発掘調査を行った。2006年度（平成18年度）前半期には第67次調査として、合計430㎡の調査が予定されていたが、そのうち北側の約200㎡（第67次Ａ調査区）については工事実施の工程上、2006年（平成18年）６月初旬までに発掘調査を完了しなければならなかった。発掘調査の実施可能な時期は年度当初に当たり、入札による発掘支援会社の導入などは不可能と思われた。そこで、埋蔵文化財センターの職員２名・嘱託職員２名の計４名の調査員を現場の実測図作成や写真撮影のため投入し、予定どおりに発掘調査を終了することができた。その後、引き続いて2006年(平成18年）６月から第67次調査Ｂ・Ｃ区の発掘調査を実施した。

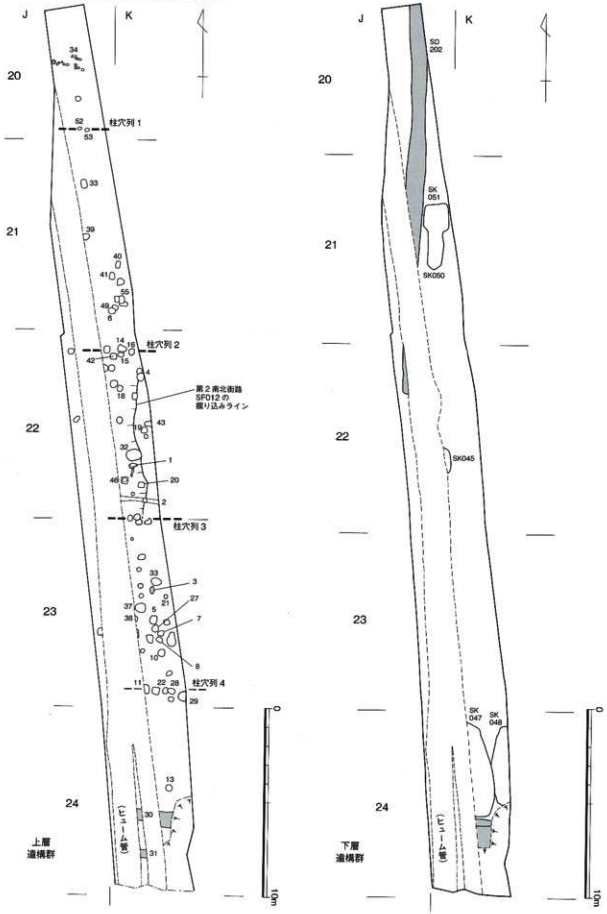
調査期間
2006年
（平成18年）
5月8日～
6月1日

第67次調査Ａ区は南北約48ｍ、東西約５ｍの細長い調査区で、調査面積は約200㎡である。本調査区の東には平成14

調査面積
約200㎡



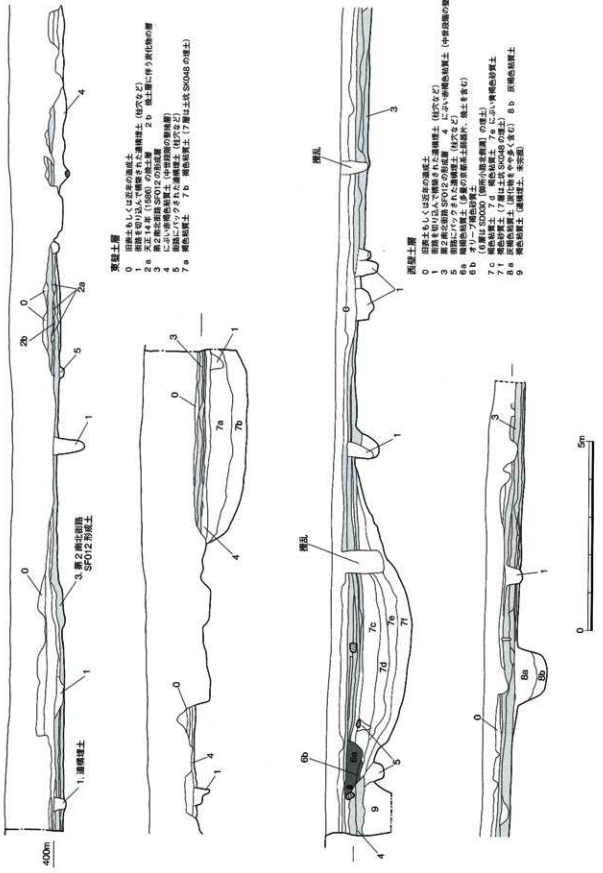
第312図　調査区位置図(1/1,000)



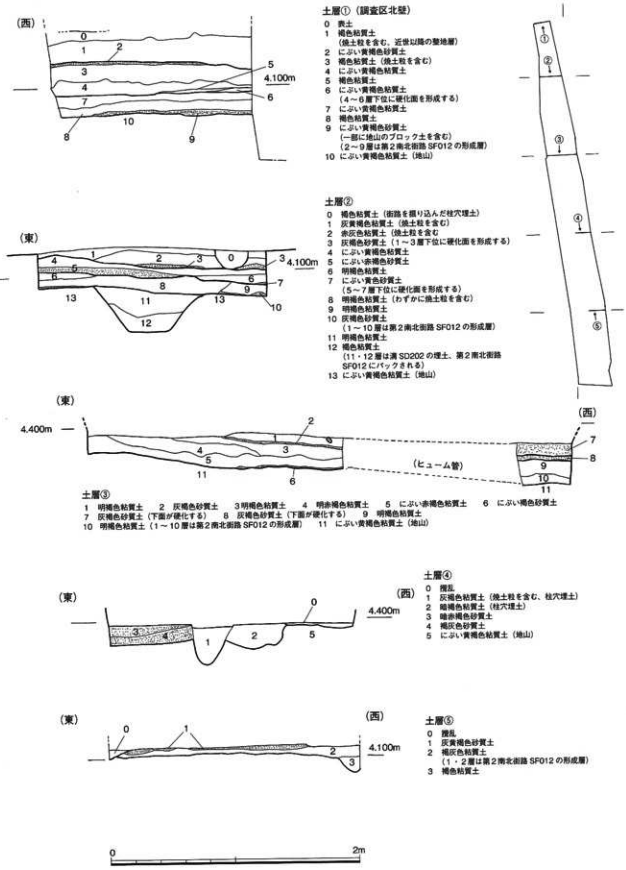
第 313 図　第 67 次調査Ａ区遺構配置図（1/200）

第９表　中世大友府内町跡第 67 次調査Ａ区遺構一覧表

遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	遺構の時期	特記事項	掲載頁
SX001	S001	礎石・焼土	K22 区	16 世紀末葉	上層遺構群・天正 14 年（1586）焼土が礎石を覆う	281
SD002	S002	溝	K22 区	16 世紀末葉～17 世紀初頭遺構	上層遺構群・焼土 S001 を切る。近世の溝か？	285
SX003	S003	土器片集中部	K23 区	16 世紀後葉～末葉	上層遺構群・京都系土師器片の集中部。焼土層より下位で検出。	284
SP004	S004	柱穴	K22 区	16 世紀末葉	上層遺構群	
SP005	S005	柱穴	K23 区	16 世紀末葉	上層遺構群	
SP006	S006	柱穴	J21 区	16 世紀末葉	上層遺構群	
SP007	S007	柱穴	K23 区	16 世紀末葉	上層遺構群	
SP008	S008	柱穴	K23 区	16 世紀末葉	上層遺構群	
SP009	S009	柱穴		16 世紀末葉	上層遺構群	282
SP010	S010	柱穴	K23 区	16 世紀末葉	上層遺構群・京都系土師器（完形）・備前焼壺口縁部	
SP011	S011	柱穴	K23 区	16 世紀末葉	上層遺構群・柱穴列４を構成	281
SF012	S012	道路		16 世紀末葉	上層遺構群・第２南北街路	286
SP013	S013	柱穴	K24 区	16 世紀末葉	上層遺構群	
SP014	S014	柱穴	K22 区	16 世紀末葉	上層遺構群・柱穴列２を構成	281
SP015	S015	柱穴	K22 区	16 世紀末葉	上層遺構群・柱穴列２を構成	281
SP016	S016	柱穴	K22 区	16 世紀末葉	上層遺構群・柱穴列２を構成	281
SP017	S017	柱穴		16 世紀末葉	上層遺構群	
SP018	S018	柱穴	K22 区	16 世紀末葉	上層遺構群	
SP019	S019	柱穴	K22 区	16 世紀末葉	上層遺構群	282
SP020	S020	柱穴	K22 区	16 世紀末葉	上層遺構群・天正 14 年（1586）焼土下より検出。	
SP021	S021	柱穴	K23 区	16 世紀末葉	上層遺構群	
SP022	S022	柱穴	K23 区	16 世紀末葉	上層遺構群・柱穴列４を構成	
SP023	S023	柱穴	J22 区	16 世紀末葉	上層遺構群	
SP024	S024	柱穴		16 世紀末葉	上層遺構群	
SP025	S025	柱穴	J21 区	16 世紀末葉	上層遺構群	
SP026	S026	柱穴		16 世紀末葉	上層遺構群	
SP027	S027	柱穴	K23 区	16 世紀末葉	上層遺構群	
SP028	S028	柱穴	K23 区	16 世紀末葉	上層遺構群・柱穴列４を構成	281
SP029	S029	柱穴	K23 区	16 世紀末葉	上層遺構群・柱穴列４を構成	281
SD030	S030	溝	K24 区	16 世紀末葉	上層遺構群・御所小路北側溝	285
SD031	S031	溝	K24 区	16 世紀末葉	上層遺構群・御所小路北側か？	286
SP032	S032	柱穴	K22 区	16 世紀末葉	上層遺構群	
SP033	S033	柱穴	K23 区	16 世紀末葉	上層遺構群	
SX034	S034	石列		16 世紀末葉	上層遺構群・周辺より、京都系土師器出土	284
SP035	S035	柱穴		16 世紀末葉	上層遺構群	
SP036	S036	柱穴	J20 区	16 世紀末葉	上層遺構群	
SP037	S037	柱穴	K23 区	16 世紀末葉	上層遺構群	
SP038	S038	柱穴		16 世紀末葉～17 世紀初頭	上層遺構群・軟質施釉陶器出土	282
SP039	S039	柱穴	J22 区	16 世紀末葉	上層遺構群	
SP040	S040	柱穴	K21 区	16 世紀末葉	上層遺構群	
SP041	S041	柱穴	J21 区	16 世紀末葉	上層遺構群	
SP042	S042	柱穴	J22 区	16 世紀末葉	上層遺構群・柱穴列２を構成	
SP043	S043	柱穴	K22 区	16 世紀末葉	上層遺構群	
SP044	S044	柱穴	K22 区	16 世紀末葉	上層遺構群	282
SK045	S045	土坑	K22 区	不明	下層遺構群・在地系土器のみ出土。京都系はなし。	290
SP046	S046	柱穴	K22 区	16 世紀末葉	上層遺構群・礎盤をもつ。	282
SK047	S047	土坑	K24 区	不明	下層遺構群	290
SK048	S048	土坑	K24 区	不明	下層遺構群・京都系土師器を含む？	290
SP049	S049	柱穴	J21 区	16 世紀末葉	上層遺構群	
SK050	S050	土坑	J21 区	不明	下層遺構群	
SK051	S051	土坑	J21 区	不明	下層遺構群	
SP052	S052	柱穴	J20 区	16 世紀末葉	上層遺構群・柱穴列１を構成	281
SP053	S053	柱穴	J20 区	16 世紀末葉	上層遺構群・柱穴列１を構成	281
SD202	S202	溝	J20～J22 区	14 世紀	下層遺構群	289



第314図　第67次Ａ調査区土層実測図①（1/80）



土層①（調査区北壁）
0　表土
1　褐色粘質土
（後土粒を含む、近世以降の整地層）
2　にぶい黄褐色砂質土
3　褐色粘質土（後土粒を含む）
4　にぶい黄褐色粘質土
5　褐色粘質土
6　にぶい黄褐色粘質土
（4～6層下位に硬化面を形成する）
7　にぶい黄褐色粘質土
8　褐色粘質土
9　にぶい黄褐色粘質土
（一部に地山のブロック土を含む）
（2～9層は第2南北街路 SF012 の形成層）
10　にぶい黄褐色粘質土（地山）

土層②
0　褐色粘質土（街路を掘り込んだ柱穴埋土）
1　灰黄褐色粘質土（後土粒を含む）
2　赤灰色粘質土（後土粒を含む）
3　灰褐色砂質土（1～3層下位に硬化面を形成する）
4　にぶい黄褐色粘質土
5　にぶい赤褐色砂質土
6　明褐色粘質土
7　にぶい黄色砂質土
（5～7層下位に硬化面を形成する）
8　明褐色粘質土（わずかに後土粒を含む）
9　明褐色粘質土
10　灰褐色砂質土
（1～10層は第2南北街路 SF012 の形成層）
11　明褐色粘質土
12　褐色粘質土
（11・12層は溝 SD202 の埋土、第2南北街路 SF012 にパックされる）
13　にぶい黄褐色粘質土（地山）

土層③
1　明褐色粘質土　2　灰褐色砂質土　3 明褐色粘質土　4　明赤褐色粘質土　5　にぶい赤褐色粘質土　6　にぶい褐色砂質土
7　灰褐色砂質土（下面が硬化する）　8　灰褐色砂質土（下面が硬化する）　9　明褐色粘質土
10　明褐色粘質土（1～10層は第2南北街路 SF012 の形成層）　11　にぶい黄褐色粘質土（地山）

土層④
0　撹乱
1　灰褐色粘質土（後土粒を含む、柱穴埋土）
2　暗褐色粘質土（柱穴埋土）
3　暗赤褐色砂質土
4　暗灰色砂質土
5　にぶい黄褐色粘質土（地山）

土層⑤
0　撹乱
1　灰黄褐色砂質土
2　暗灰色粘質土
（1・2層は第2南北街路 SF012 の形成層）
3　褐色粘質土

第315図　第67次A調査区土層実測図①（1/30）

年度に発掘調査を実施した第22次・第９次調査区、西には2007年度（平成19年度）に発掘調査を実施した第79次調査区が存在する。

2　遺構と遺物

(1) 遺構の概要と基本層序

一般国道10号古国府拡幅事業に伴う発掘調査では、事業対象地区を国土座標（旧日本測地系）に乗せた10ｍ方眼で区画している。それぞれの区画には西から東へＪ～Ｍ、北から南へ１～78の番号を付し、アルファベットと数字の組み合わせで、各々の区画を呼称することにしている。第67次調査Ａ区は、東西がＪ・Ｋ区、南北が20～24区に相当する。そのため、必要に応じて当調査区を「Ｊ・Ｋ－20～24区」と呼称することがある。ちなみに、本調査区に引き続いて発掘調査を実施した第67次Ｂ調査区については「Ｋ－25・26区」、第67次Ｃ調査区については「Ｋ・Ｍ－27・28区」と呼称することとする。

Ｊ・Ｋ-20～24区

中世大友府内町跡第67次Ａ調査区（第213図）では、表土下に堆積する客土や旧地表土を重機によって除去すると、16世紀末葉頃の遺構面が現われる。当該遺構面は、中世府内のメインストリートである第２南北街路と大友氏館跡の東側に位置する「桜町」を構成する町屋の遺構群と推定された。これらの遺構群を「上層遺構群」と呼称する。第２南北街路を形成する粘質土と砂質土の互層は層厚が約40cmあり、これらを人口層位で少しずつ撤去しながら、遺構検出と遺構の掘り下げを行った。第２南北街路形成層の撤去に伴う遺構検出は２回ほど行い、多数の柱穴を確認した。これによって第２南北街路の上位から掘り込まれた柱穴と中位以下から掘り込まれた柱穴が存在することが想定されたが、出土遺物の様相が必ずしも合致するわけではなく、上位と中位以下で明確な時間差が存在するかどうかは確認が取れなかった。上層遺構群に属する遺構は礎石１・柱穴多数・柱穴列４・土器片集中部１・石列１・溝３・道路（第２南北街路）１などで、そのほとんどは16世紀末葉の所産である。

上層遺構群

下層遺構群　第２南北街路を形成する土層群をすべて撤去した後に検出された遺構を「下層遺構群」と呼称する。下層遺構群に属するものは溝１・土坑５で、すべてが地山直上で検出されている。下層遺構群に属する遺構からの出土遺物は僅少で、遺構の詳細な構築時期を特定できるものは少ない。この中で、溝SD202は14世紀代に遡るものであることが確認された唯一の遺構である。

以下、上層遺構群・下層遺構群の順で、調査を行った遺構・遺物の詳細を紹介したい。

(2) 上層遺構群

概要　上層遺構群に属するものは、礎石１・柱穴多数・柱穴列４・土器片集中部１・石列１・溝３・道路（第２南北街路）１などである。第２南北街路は中世府内のメインストリートであり、礎石や柱穴・柱穴列は大友氏館跡の東側に位置する「桜町」の町屋遺構の一部である。また、柱穴・柱穴列の一部は第２南北街路上に構築されているものがあり、街路が構築されて一定期間が経過した後、町屋が街路上に張り出してきたことを物語っているものと推定される。

礎石と焼土層

SX001（第316図）　J22区で検出された礎石である。礎石は幅28cm、長さ45cm、厚さ25cmを測る礫が使用され、上面を平滑にする加工がなされている。その南側には長さ約50cmの石列が敷設されている。礎石の東から南東にかけて、東西約1.4ｍ、南北約2.4ｍの範囲で焼土層が堆積している。このような状況から、礎石を使用した建物は火災によって焼失したと推定され、周辺の状況から焼土層の年代は天正14年（1586）の島津侵攻時と推定される。

天正14年（1586）焼土層

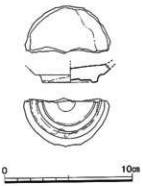
なお、この礎石は後述する柱穴列２と柱穴列３の区画内に位置しており、東側に隣接する第９次調

『桜町』の礎石建物

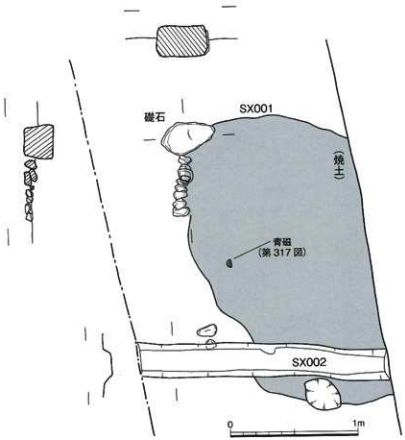
査Ⅲ区の調査成果[1]と併せて検討すると、桜町を構成する町屋前面の礎石建物の一部と推定される。

SX001周辺出土遺物（第317図）

図示したものは、SX001付近に堆積していた焼土層から出土した遺物である。中国産青磁碗の底部破片で、内底部と見込みが露胎となる。15～16世紀代の所産である。



第317図　SX001周辺出土遺物実測図（1/3）



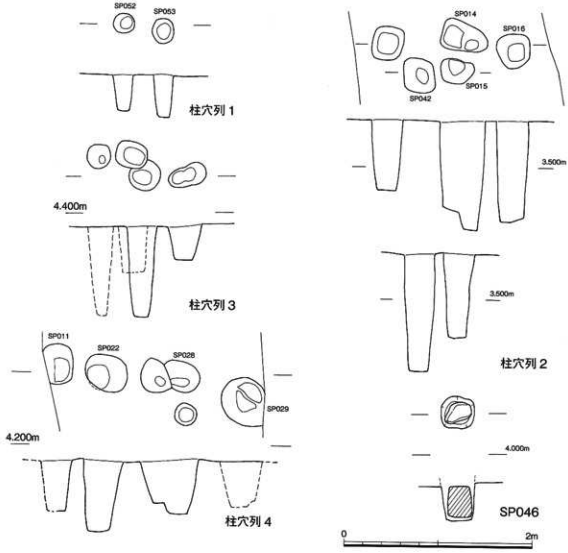
第316図　SX001・SD002実測図（1/30）

柱穴・柱穴列（第318図）　本調査区で検出された柱穴は多数におよび、特にJ20～J22・K22区に位置する柱穴は、大多数が第２南北街路SF012を切り込んで構築されている。

4列の柱穴列

また、本調査区では４列の柱穴列が確認され、それぞれの柱穴列を北側から柱穴列１～４と呼称することにした。柱穴列１－柱穴列２間の距離は約11.5m、柱穴列２－柱穴列３間の距離は約8.5m、柱穴列３－柱穴列４間の距離は約９mである。**柱穴列１**はJ20区に位置し、SP052・SP053の２基の柱穴で構成される。第２南北街路形成土の掘り下げ・撤去を一定深度で進めた段階で検出された。**柱穴列２**はJ22区に位置し、SP014～SP016・SP042の４基および遺構番号未設定１基の計５基の柱穴で構成される。街路形成土の上位から掘り込まれているものが多い。**柱穴列３**はJ22～J23区に位置し、遺構番号未設定の柱穴４基で構成される。これらの柱穴もすべてが街路形成土の上位から掘り込まれている。**柱穴列４**はJ23区に位置し、SP011・SP022・SP028・SP029の４基と遺構番号未設定２基の計６基の柱穴で構成される。街路形成土の上位から掘り込まれているものが多いが、街路形成土の掘り下げ・撤去を一定深度で進めた段階で検出されたものもある。また、SP022とSP028は切り合い関係を有し、遺構の構築順序はSP028（古）→SP022（新）である。以上の柱穴列は東側に隣接す

註（1）大分県教育庁埋蔵文化財センター『豊後府内４　中世大友府内町跡第９次・第12次・第22次・第28次・第48次調査区』（大分県教育庁埋蔵文化財センター第９集　2005年）



第318図　柱穴列・SP046実測図（1/40）

「桜町」の区画遺構または掘立柱建物の一部

る第22次・第９次調査区でも延長部が確認されており、「桜町」の町屋遺構群に属する区画遺構あるいは掘立柱建物の一部と推定される。また、柱穴列は第２南北街路を切って構築されていることから、街路が構築されて一定期間が経過した後、町屋の遺構群が街路上に張り出してきたことを物語っている。柱穴列を構成する柱穴からは図示可能な出土遺物は認められなかったものの、街路を切って構築されていることから、16世紀末葉以降の所産であると断定できる。

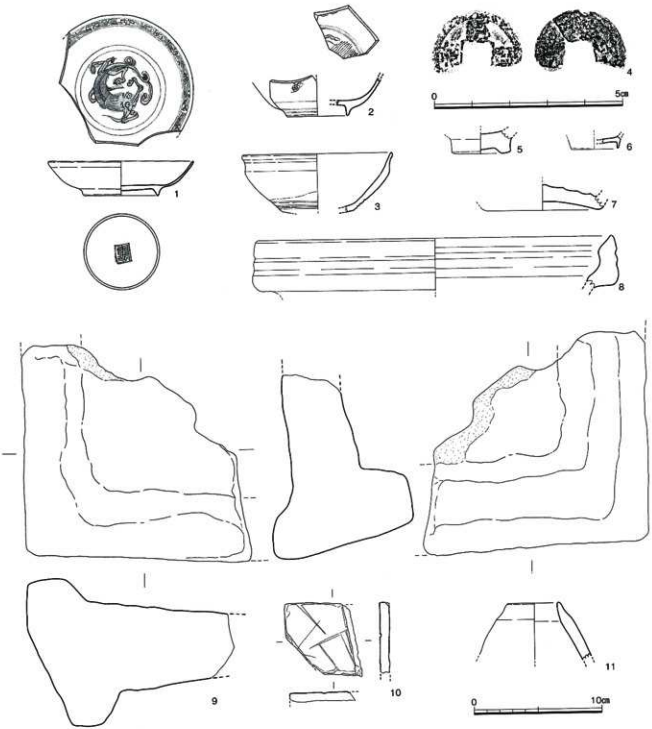
礎盤をもつ柱穴

次に、SP046（第318図）は礎盤をもつ柱穴で、柱穴の底部に長軸25cm、短軸20cm、厚み30cmの礫を設置している（写真図版15参照）。出土遺物はないが、第２南北街路形成土の掘り下げ・撤去を一定深度で進めた段階で検出された。

その他、SP019・SP038・SP044・SP009・SP014からは、図示可能な出土遺物が認められる。

天正14年（1586）以降も柱穴が構築される

このうち、SP038からは軟質施釉陶器碗が出土しており、遺構の構築年代が16世紀末葉から17世紀初頭に降るものであることが確認できる。本調査区で検出された柱穴の一部が、天正14年（1586）の島津侵攻以降にも構築されていたことを物語る遺構である。



第319図　柱穴出土遺物実測図（1/30）

柱穴出土遺物（第319図）　１～３はSP019からの出土遺物である。１は中国景徳鎮窯系青花皿で、小野分類E群皿に属する。内底部には「富貴佳器」の銘款が認められる。２は中国景徳鎮窯系青花碗で、小野分類E群碗である。３は瀬戸美濃産陶器の天目碗で、大窯３期後半の製品である。４はSP036出土の銅銭で、銹出のため、銭文は判読不明である。５はSP038出土の軟質施釉陶器碗である。底部の破片で、胎土は赤褐色を呈し、外面に白濁釉、内面に黒褐釉を施す。当該遺物は近年の研究で16世紀末葉から17世紀初頭以降に生産年代が限定されることが確認できており、SP038の遺構の構築年代

軟質施釉陶器碗

を特定できる出土遺物である。6はSP044出土の白磁小杯で、森田分類E群の製品である。7～10はSP009からの出土遺物である。7は中国産の褐釉陶器壺の底部で、内面や内底部にも施釉している。8は備前系陶器擂鉢で、乗岡編年6期に編年される資料である。9は凝灰岩製の石造物で、手水鉢などの製品であろうか。10は粘板岩を素材とする砥石で、表面に使用痕と思われる条線が数本認められる。11はSP014出土の焼塩壺である。

土器片集中部

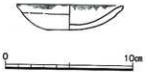
京都系土師器片の集積

SX003　K23区に位置する遺構である。南北約40cm、東西約25cmの範囲に京都系土師器の破片が集積されていた（写真図版15参照）。土器片はすべて京都系土師器で構成され、それ以外のロクロ目土師器などは認められないようである。土器片集中部の周辺に掘方などは検出できなかった。京都系土師器は塩路編年2期に比定されるものであるが、小片のため、図示可能なものは存在しない。また、遺構の検出レベルは、天正14年(1586)の焼土層より下位であることも確認している。出土遺物の年代観などから、遺構の構築年代は16世紀後葉～末葉に比定される。

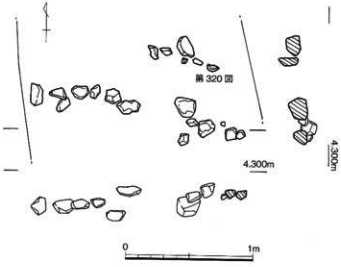
石列

SX034（第321図）　J20区に位置する遺構で、頭大から拳大の礫で構成された石列である。石列は3単位が確認されており、主軸方向は前述した柱穴列の方向と軸を一にする。石列は南北街路形成土を撤去・掘り下げ中に検出されたもので、街路に付属する施設か街路上に張り出した町屋(桜町）の区画遺構の一部である可能性が考えられる。街路改修時に構築された石列である可能性が高いが、機能していた時間は短く、構築後一定期間を経た後、再び街路改修等の嵩上げによって埋没したものである。石列の周辺から、京都系土師器皿が出土しており、遺構の構築年代は16世紀末葉と推定される。

SX034出土遺物（第320図）　図示した資料は、京都系土師器皿である。口縁部の内外面にススの付着が認められ、灯明皿として使用されたものである。塩地編年2期に分類され、16世紀後葉の所産である。



第320図　SX034出土遺物実測図（1/3）



第321図　SX034実測図（1/30）

溝

SD002（第316図）　J22区に位置する溝で、その規模は幅約0.3m・長さ約2m・深さ20cmである。西側についてはヒューム管の構築により破壊を受けているが、ヒューム管より西の地点では延長部が確認されていないため、小規模な溝と推定される。遺構の主軸方向は柱穴列や後述する御所小路の側溝SD030と同一である。SD002は天正14年(1586)の焼土層を切って構築されていることから、16世紀末葉から17世紀初頭以降の所産と推定される。出土遺物は認められなかった。

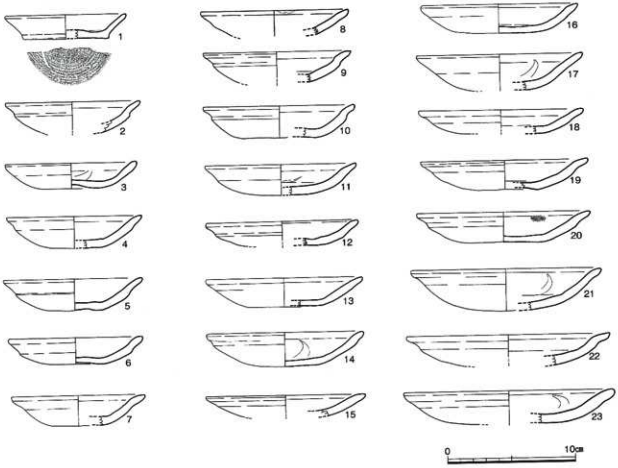
天正14年(1586)焼土層を切る

SD030　K24区に位置する溝で、その規模は幅0.6～0.75m・長さ1.8m・深さ25cmである。溝の西側はヒューム管の下に伸び、西側は攪乱によって破壊されている。小規模な溝であるが、埋土からは多量の土師質土器が破片の状態で出土した(写真図版15参照)。土師質土器はその大半が京都系土師器皿である。遺構の位置から判断して、SD030は大友氏館正門に直結する「御所小路」の北側溝であると断定でき、多量の京都系土師器破片の出土とともに注目される。当該溝の延長部は第9次調査区でも検出されている[2]。溝の構築年代は16世紀末葉に比定される。

多量の京都系土師器皿が出土

御所小路北側溝

SD030出土遺物（第322図）　1は在地系の土師質土器小皿で、底部外面に糸切り痕が認められる。2～23は京都系土師器皿で、器壁の厚みが5～8mm前後を測る。また、20の内面にわずかに布目痕が認められ、ナデ仕上げの際に使用された布の痕跡と推定される。



第322図　SD030出土遺物実測図（1/3）

註（2）大分県教育庁埋蔵文化財センター『豊後府内4　中世大友府内町跡第9次・第12次・第22次・第28次・第48次調査区』（大分県教育庁埋蔵文化財センター第9集　2005年）

SD031　K24区に位置する溝で、御所小路の北側溝SD030の南約２ｍに位置する。ヒューム管や攪乱の存在により、調査できた範囲は極めて狭少で、幅約50cm、長さ約40cm、深さ約20cmである。図示可能な出土遺物は認められなかった。遺構の位置関係から、当該溝も御所小路北側溝である可能性が考えられるが、調査範囲が狭いため断定できない。溝の構築年代は16世紀末葉と推定される。

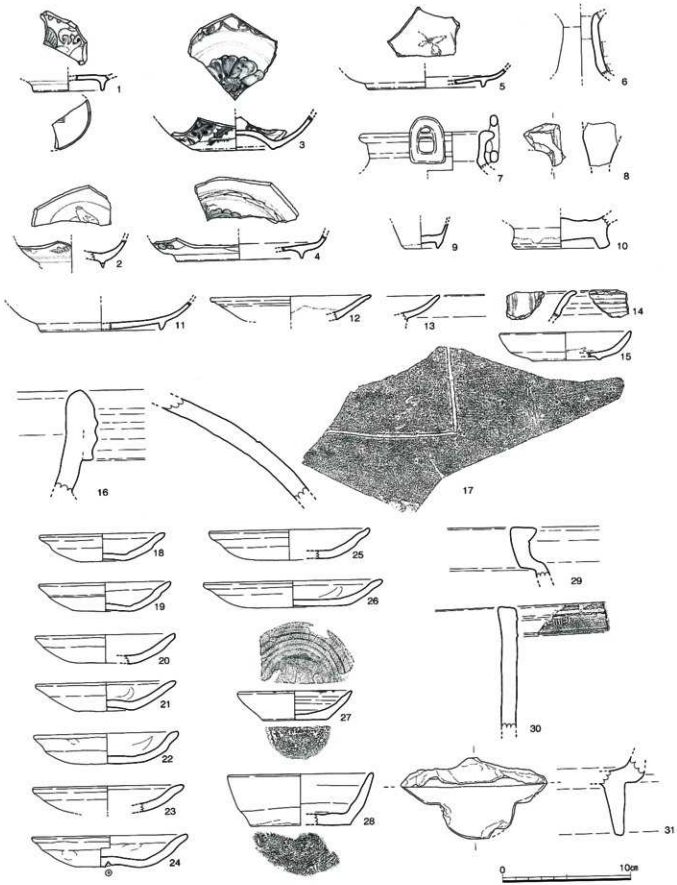
J22区で街路構築当初の掘り込みラインを検出

第２南北街路SF012　本調査区の壁面および土層観察用ベルトにおける土層の堆積状況から、J20～J24区・K21区の全面およびK22～K23区の一部にかけて、第２南北街路SF012の硬化面や街路を形成する粘質土と砂質土の互層などが認められた（第315図）。また、J22区では街路構築に伴う掘り込みラインを検出することに成功し、第２南北街路構築当初の時期には当該ライン付近まで、街路の東側境界部がおよんでいることが想定された。しかしながら、街路の東側境界と「桜町」の西側境界とを区画する側溝などの付属遺構は確認できなかった。また、前述したとおり、本調査区で検出された柱穴は街路上に構築されたものも多く、街路が敷設されて一定期間が経過した後、町屋が街路上に張り出して構築されてきたことを物語るとともに、街路と町屋の境界が不明瞭で、側溝などの明確な区画遺構が造営されなかったことが判明する。以上の所見は第28次・第22次・第９次調査区など、他の調査地点でも同様な調査成果が得られている。以上のような状況から、本調査区では第２南北街路SF012の道路幅等を確定する良好な資料は得られなかった。街路を形成する土層中からは小破片が多いものの、多数の出土遺物が認められた。これらの出土遺物や他の調査区での所見より、第２南北街路の構築時期は16世紀末葉に比定され、数度の改修を経ながら、17世紀初頭まで存続していたと推定される。

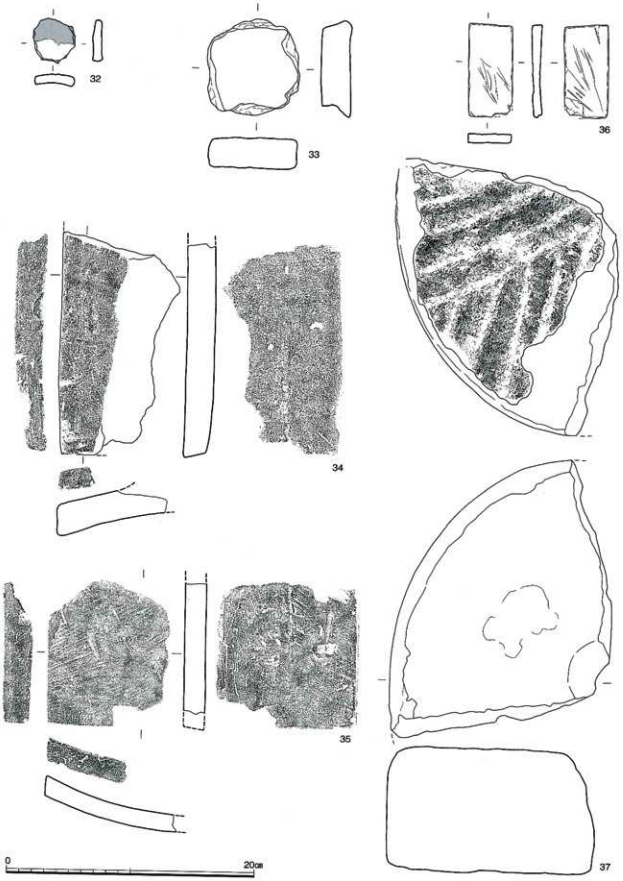
鼎形をした青磁香炉

SF012出土遺物（第323～325図）　第323図１～４は中国景徳鎮窯系青花で、１・２は小野分類Ｅ群碗（鏡頭心碗）に属する。３は鉢で、底部は蓋笥底を呈する。４は皿で小野分類Ｅ群皿に分類される製品である。５は五彩の皿で、見込みに文様が描かれており、青・緑等の色絵が認められるものの、風化により本来の色彩を失っている。６～８は中国産の青磁である。６は瓶で、外面に把手が剥落した痕跡が認められる。７は鼎形をした香炉で、優品であるが、口縁部のみが残存している。８は小破片のため、器種不明であるが、残存部に透かし孔が存在していた痕跡が認められることから、「器台」である可能性が高い。９は中国産の白磁で、森田分類Ｅ群に属する小杯の底部破片である。10は白磁四耳壺の底部で、高台端部から内底部にかけては露胎となる。14世紀代の製品である。11～13は白磁皿で、このうち11については森田分類Ｅ群に属する製品、12については見込みと内底部付近が露胎となる製品である。14は志野焼の鉢で、口縁内面に鉄絵による文様を描く。生産年代は16世紀末から17世紀前葉で、図示可能なSF012出土遺物の中では最も新しい様相を示す。第２南北街路が江戸時代初期まで継続使用されていたことを示唆する遺物である。15は瀬戸美濃産の陶器皿で、大窯Ⅲ期後半の製品である。16・17は備前焼大甕で、16は口縁部、17は肩部の破片である。後者の外面にはヘラ記号が認められる。18～26は京都系土師器皿で、24の底部外面には径６mm程度の刺突痕がある。27は在地系のロクロ目土師器皿で、口縁部にススの付着が認められる。28は箱形の土師質土器坏で、14世紀から15世紀代の製品と推定されるため、混入品である。29～31は在地産の瓦質土器で、29・30は火鉢の口縁部、31は鉢の脚部である。30の外面には２条の細い突帯を巡らし、突帯間には刻印による二連雷文が押捺されている。第324図32・33は陶器片あるいは瓦片の再加工品で、32は瀬戸美濃産の天目碗を、33は平瓦を略円形に再加工している。34・35は平瓦の破片である。36は砥石で、頁岩を素材とする。37は石臼の上臼で、安山岩を素材としている。

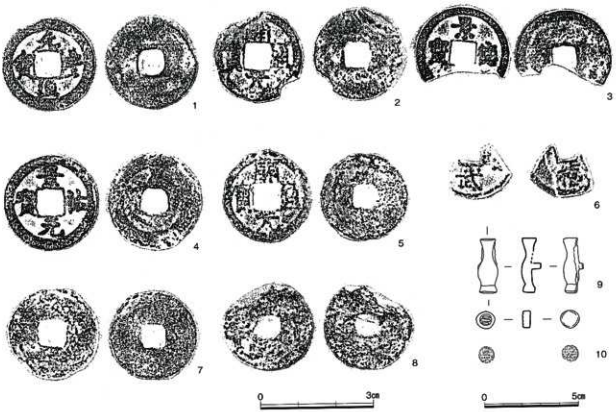
志野焼



第323図　SF012出土遺物実測図①（1/3）



第324図　SF012出土遺物実測図②（1/3）



第325図　SF012出土遺物実測図③（1/1・1/2）

「洪武通寶」の背文に「福」字

懸仏の水瓶

分銅

第325図１～８は銅銭で、銭種等については巻末の遺物観察表を参照されたい。このうち、６は「洪武通寶」で、背文に「福」字が認められ、中国の福州付近で製作されたといわれている銅銭である。９は銅製品で、その形態から懸仏の「水瓶」の部位に相当する資料である。10は分銅で、径0.9cm、厚み0.4cm、重さ1.6ｇを測る。表面に「三」の文様を鋳出している。

(3) 下層遺構群

概要　下層遺構群に属するものは、溝１・土坑５である。これらは第２南北街路の形成土をすべて撤去した後に検出され、街路構築（16世紀末葉）以前と推定される遺構群である。

溝

第22次調査区で延長部を確認

第28次調査区では延長部を未確認

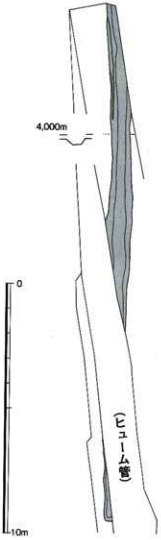
SD202（第326図）　J20～J22区に位置する溝である。その規模は幅0.9～1.0ｍ、長さ20.6ｍを測る。遺構の断面形態は逆台形を呈する。J22区で南端部を確認し、これ以上南に伸びないことを確認している。北はさらに調査区外に伸び、2002年度（平成14年度）に発掘調査を実施した第22次調査で延長部が確認されている。第22次調査では当該溝に「SD202」と遺構番号が付されていたため、第67次調査Ａ区でも同一の遺構番号とした。第22次・第67次調査Ａ区での遺構の総延長は26.3ｍにおよぶが、さらに北側約10ｍに位置する第28次調査では延長部は確認されていない。第22次調査では遺構埋土から土玉や獣骨が出土したが、明確な時期を特定できる遺物は認められなかった。今回の第67次調査Ａ区では、小破片のため、図示していないが、埋土中から小皿部に貫通孔をもち円筒状の脚台を有するタイプの土師質土器燭台が出土しており、遺構の年代を14世紀代に特定できることが判明した。出土遺物は僅少で、図化可能な遺物はない。遺構の性格は何らかの区画溝と推定されるが、その詳細を明らかにすることはできなかった。

土坑

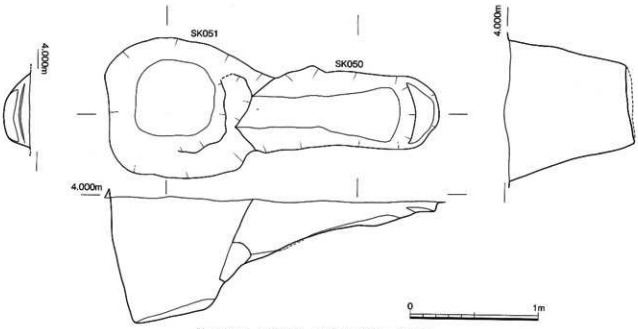
SK045　J22区に位置する土坑で、その平面形態は略楕円形を呈する。遺構の西半分はヒューム管の下に伸びており、その規模は明らかではないが、現状で長径約1.4ｍ、短径0.4ｍ、深さ0.3ｍを測る。第２南北街路SF012によって完全にパックされており、街路構築以前の遺構と推定される。遺構の性格は廃棄土坑であろう。出土遺物は僅少で図示可能なものはない。遺構の時期は第２南北街路が構築される16世紀末葉以前に比定されるが、詳細な年代は不明である。

SK047・SK048　K24区に位置する土坑である。いずれも大型の土坑で、SK047は現状で南北5.0ｍ・東西1.1ｍ・深さ0.8ｍ、SK048は南北4.0ｍ・東西1.0ｍ・深さ0.5ｍである。両者は切り合い関係にあり、遺構の構築順序はS048(旧)→S047(新)となる。いずれも大型の廃棄土坑と推定されるが、出土遺物は僅少で、遺構の構築時期を特定できるような資料は認められなかった。

SK050・SK051（第327図）　J21区に位置する土坑である。SK050の平面形態は長楕円形を呈し、その規模は長径2.0ｍ・短径0.8ｍ・深さ0.3ｍである。SK051の平面形態は略楕円形で、その規模は南北1.3ｍ・東西1.4ｍ・深さ1.0ｍを測る。両者は廃棄土坑と推定され、切り合い関係にあるが、互いの埋土が類似しており、遺構の構築順序を明らかにできていない。いずれの土坑も出土遺物が僅少で、明確な時期を特定するものは認められなかった。



第326図　SD202実測図（1/150）



第327図　SK050・SK051実測図（1/30）

３　小結

第67次調査Ａ区は平成12～13年度に調査を実施した第９次調査、平成14年度に調査を実した第22次調査の西に隣接する縦長で狭小な調査区である。そのため、発掘調査は第９次および第22次調査の成果を追認・補足する結果に留まった。しかしながら、今回の調査によって中世大友府内における町屋構造の細部が、一部であるが明らかになったため、「小結」として若干の記述を付け加えておきたい。

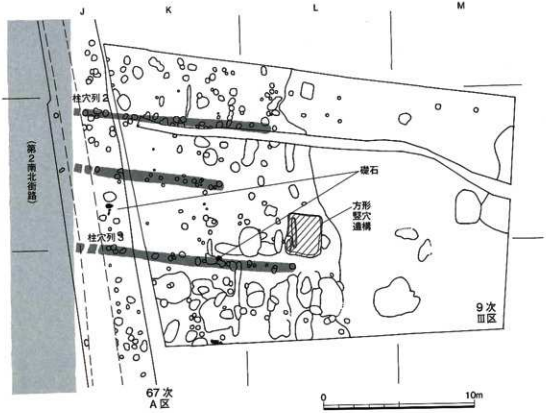
第67次調査Ａ区の発掘調査地点は、中世大友府内のメインストリートである「第２南北街路」と大友氏館跡の前面に位置する町屋のひとつである「桜町」に相当する。これまでの発掘調査の成果から、16世紀末葉頃における「桜町」の町屋構造は、第２南北街路を間口として幅３～６ｍの間隔で柱穴列が検出され、短冊形地割を形成していることが判明している。町屋の裏手には井戸が置されており、その数から共同井戸と考えられている[3]。

今回報告した第67次調査Ａ区のK22区では、礎石SX001が検出された。その周辺は焼土層が広がっており、礎石を使用した建物が天正14年（1586）の島津侵攻に伴う火災で焼したことが想定される。

礎石
柱穴列

試みに第67次Ａ調査区と第９次調査Ⅲ区[4]の遺構配置図をつなげたものが、第328図である。礎石SX001が位置するK22区周辺では３列の柱穴列が認められ、短冊形地割を形成していたことが当該調査でも追認された。最も北側の柱穴列が67次Ａ区の「柱穴列２」に、最も南側の柱穴列が「柱穴列３」に対応する。柱穴列によって区画された短冊形地割の間口は、北側が約3.5ｍ、南側が約５ｍである。この段階においては、町屋に面した第２南北街路の東端部に明確な側溝等の施設は設けられていないようである。

注目すべきことは、第９次調査Ⅲ区でも礎石１個が検出されており、この礎石の位置が第67次調査区の礎石SX001と同じ短冊形地割の区画内に位置することである。つまり、67次SX001と９次調査



第328図　第67次調査Ａ区と第９次調査Ⅲ区の短冊形地割りと礎石（1/250）

Ⅲ区の礎石は同一の建物、もしくは同一敷地の建物で使用されていたことが判明するのである。また、この礎石を使用した建物が存在した区画には、「方形竪穴遺構SK021」も存在する。この方形竪穴遺構は南北2.8ｍ、東西2.3ｍ、深さ25 の規模をもち、遺構内に２条の溝を有するが、柱穴などの施設は存在していない。当該遺構の機能は、小型の蔵もしくは倉庫と推定されている。方形竪穴遺構は中世大友府内町跡における他の調査地点でも数基が検出されているが、その数は小数に留まっており、「桜町」の領域では当該遺構が唯一の事例である。この区画には礎石建物と形竪穴遺構がセットで存在していた可能性が高く、「桜町」の短冊形地割の中では注目すべき区画であったことが指摘できる[5]。

方形竪穴遺構－小型の蔵もしくは倉庫

礎石建物と方形竪穴遺跡がセット

「桜町」の領域からは、鞴・坩堝・鋳型など鍛冶に関連する遺物の出土が一定量見られ、９次調査Ⅲ区の方形竪穴遺構SK021からも石製の大型鞴の羽口が出土している。出土遺物や遺構の状態から、桜町に居住した商職人たちの大多数は鍛冶関連の職業に携わっていたと想定されており、上記で指摘した短冊形地割の区画に居住した16世紀末葉頃の住人も、鍛冶関連の職業で生計を立てていた商職人であった可能性が高いと考える。

鍛冶関連の商職人

註　(3)坂本嘉弘「巡察師ヴァリニャーノのみた豊後「府内」－1580年の豊後国「府内」の描写－」（『キリシタン大名の考古学』思文閣出版2009年）28～30頁

(4)大分県教育庁埋蔵文化財センター『豊後府内４　中世大友府内町跡第９次・第12次・第18次・第22次・第28次・第48次調査区（第３分冊）』（一般国道古国府拡幅事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（２）　大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告第９集　2006年）

(5)なお、第９次調査Ⅲ区で検出された礎石と柱穴列（最も南側に位置する柱穴列で、数回の改修が認められる）については、両者が接した位置に構築されているため、同時期に存在していたものかどうかは、慎重な検討が必要になると思われる。

第５節　中世大友府内町跡
第67次調査Ｂ区(K25・K26区)

1　調査の概要

中世大友府内町跡第67次調査Ｂ区は大分県大分市元町に所在し、標高約4.5ｍの沖積低地上に立地する。中世大友府内町跡は、大分県教育委員会が1993年に刊行した『大分県遺跡地図』において「中世大友城下町跡」の名称で登録されていた周知遺跡である。また、1987年に大分市史編さん委員会が作成した「戦国時代の府内復元想定図」によると、当該調査区は、大友氏館跡の東西側に位置する「御内町」の一部に相当することが推定されていた。

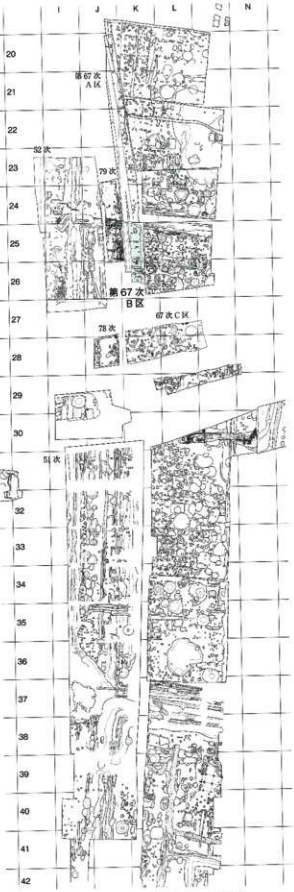
「御内町」

本節で報告する第67次Ｂ調査区（第329）については、一般国道10号古国府拡幅事業に伴って国土交通省大分河川国道事務所からの委託を受け、2006年（平成18年）６月１日～９月１日までの約３箇月間発掘調査を行った。前節で記したように、当該調査区は同年５月８日～６月１日までに発掘調査を行った第67次調査Ａ区の調査終了後に引き続いて実施したもので、一般国道10号古国府拡幅事業に伴う発掘調査で設定した調査区画（国土座標（旧日本測地系）に乗せた10ｍ方眼）のうち、K25・K26区に位置する。調査区は南北約15.5ｍ、東西5.5ｍを測り、調査面積は約77㎡である。なお、調査区の西側の幅約1.3ｍ、長さ約13ｍは近年施工されたヒューム管の埋設により攪乱を受けていた。

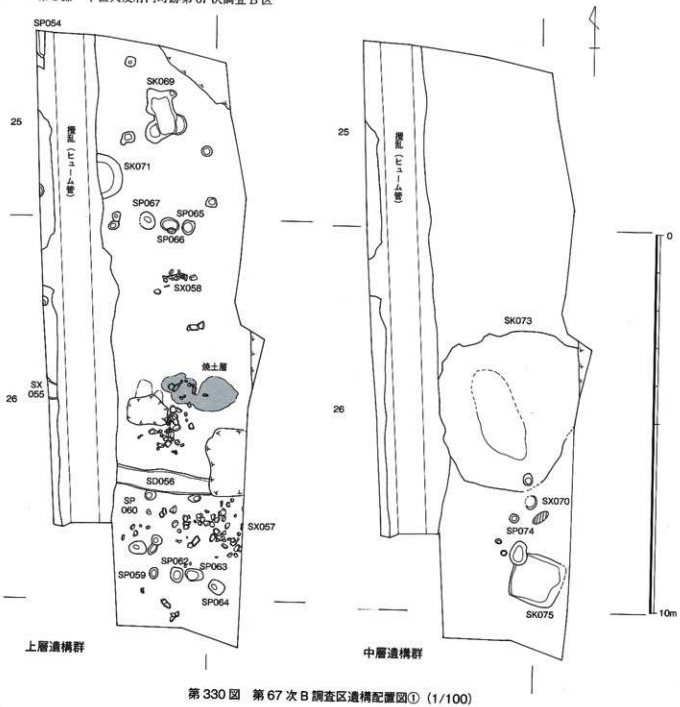
調査期間
2006年
（平成18年）
6月1日～
9月1日

調査面積
約77m²

本調査区の東には2000～2001年度（平成12～13年度）に発掘調査を実施した第９次調査Ⅰ・Ⅳ区、西には2007年度（平成19年度）に発掘調査を実施した第79次調査区が存在する。



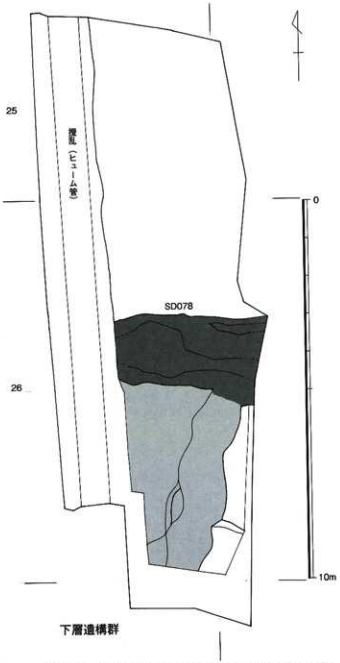
第329図　調査区位置図(1/1,000)



第330図　第67次B調査区遺構配置図①（1/100）

第10表　中世大友府内町跡第67次B調査区遺構一覧表①

遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	遺構の時期	特記事項	掲載頁
SX054	S054	不明	G25区	不明		
SX055	S055	不明	G25区	不明		
SD056	S056	溝	G26区	16世紀末葉～17世紀初頭		297
SX057	S057	遺物集中部	G26区	16世紀後葉～末葉		297
SX058	S058	集石遺構	G25区	不明	銅銭出土	297
SP060	S060	柱穴	G26区	16世紀末葉		
SP062	S062	柱穴	G26区	16世紀末葉	柱穴列を形成	299
SP063	S063	柱穴	G26区	16世紀末葉	柱穴列を形成・土錘出土	299
SP064	S064	柱穴	G26区	16世紀末葉	柱穴列を形成	299
SP065	S065	柱穴	G25区	16世紀末葉	柱穴列を形成	300



第 331 図　第 67 次 B 調査区遺構配置図②（1/100）

2　遺構と遺物

（1）基本層序と遺構群

中世大友府内町跡第67次調査B区では、表土下に堆積する客土や旧地表土を重機によって除去すると、16世紀末葉前後の遺物を包含する整地層が堆積している。この遺物包含層を人口層位で少しずつ除去しながら遺構検出を行うと、16世紀末葉頃の遺構面が現われる。当該遺構面は、柱穴や土坑・集石遺構・焼土層などで構成されており、町屋（「御内町」）関連の遺構と推定された。これらの遺構群を「上層遺構群」と呼称する。

さらに整地層の掘り下げを進めると、上層遺構群の５～10cmほど下位で、大型の土坑や柱穴が検出され、これらの遺構群を「中層遺構群」と呼称する。土坑や柱穴からの出土遺物は僅少で、16世紀前葉から中葉の所産と思われる大型土坑SK073の他には、構築時期を明確にできる遺構は少なかった。

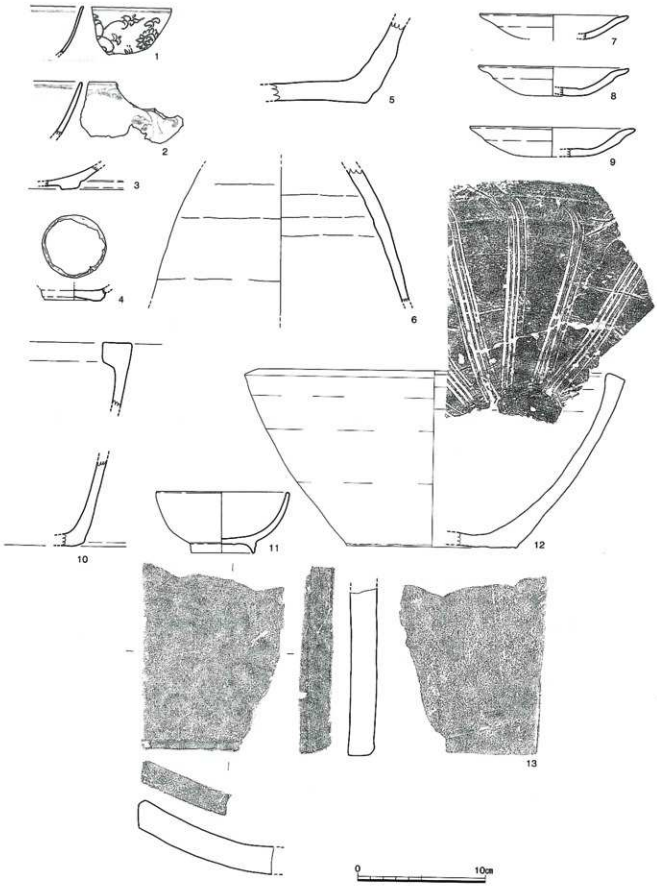
さらに掘り下げを進めると地山面に達し、当該層位で確認された遺構を「下層遺構群」と呼称する。この遺構面では逆L字状に屈曲する堀SD078が検出され、埋土上位には炭化物を多量に含む黒褐色土が堆積し、この堆積層から京都系土師器を主体としたカワラケが大量に廃棄されている状況が確認できた。後述するように、堀SD078は武家地に関連する屋敷の区画遺構であり、本調査区で最も注目すべき遺構であった。

このように、中世大友府内町跡第67次B調査区では、「上層遺構群」・「中層遺構群」・「下層遺構群」の３つの遺構面を確認した（第330・331図）。

以下、発掘調査を行った主要遺構や出土遺物の詳細を報告したい。

第 11 表　中世大友府内町跡第 67 次 B 調査区遺構一覧表②

遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	遺構の時期	特記事項	掲載頁
SP066	S066	柱穴	G25 区	16 世紀末葉	柱穴列を形成	300
SP067	S067	柱穴	G25 区	16 世紀末葉	柱穴列を形成	300
SK069	S069	土坑	G25 区	不明		299
SX070	S070	集石遺構	G26 区	16 世紀末葉		297
SK071	S071	土坑	G25 区	不明		299
SP072	S072	柱穴	G25 区	16 世紀後葉～末葉		
SK073	S073	土坑	G25 ～ G26 区	16 世紀前葉～中葉		300
SP074	S074	柱穴	G26 区	16 世紀末葉		
SK075	S075	土坑	G26 区	16 世紀後葉～末葉		299
SD078	S078	溝	G25 ～ G26 区	16 世紀前葉～中葉	京都系土師器（１期）が大量出土	300



第332図　SX057出土遺物実測図（1/3）

(2) 遺構と遺物の概要

溝SD056　K26区に位置する小規模な溝で、長さ2.5ｍ、幅0.6ｍ、深さ10cmを測る。主軸が東西方向となる溝で、柱穴SP060を切って構築されている。溝の年代を示すような出土遺物は認められないが、検出面や切り合い関係から、本調査区で最も新しい段階に位置づけられる遺構であり、その構築年代は16世紀末葉から17世紀初頭以降にくだるものと推定される。なお、本調査区に隣接する第９次調査では溝の延長部を確認していない。

16世紀末葉～17世紀初頭にくだる

遺物集中部SX057　本調査区で「上層遺構群」と仮称している面で確認した遺物集中部である。前述した溝SD056の南東側の東西約２ｍ、南北1.5ｍの範囲に拳大の礫や遺物が分布していた。礫や遺物の分布状況は意図的なものではなく、整地層中に投げ込まれたものである可能性も考えられる。出土遺物は16世紀後葉から末葉のものが主体を占める。

SX057出土遺物（第332図）　１は中国景徳鎮系青花碗で、内面に一条の圏線を描く。外面の文様は毛彫りである。２は漳州窯系青花碗である。３は中国産白磁皿の底部で、内面に白磁釉を施し、高台周辺と内底部は露胎となる。４は瀬戸美濃産の天目碗の底部破片である。破片に再加工を施し、高台部のみを残して加工している可能性がある。５・６は備前焼で、５は壺あるいは甕の底部、６は瓶または徳利である。７～９は京都系土師器皿で、塩地編年２期以降の製品である。10は在地系の瓦質土器火鉢である。11は瓦質土器埦で、これも在地系の製品である。12は瓦質土器擂鉢で、内面に５条を一単位とする擂目が施される。土坑SK075出土の破片と接合している。13は平瓦の破片である。

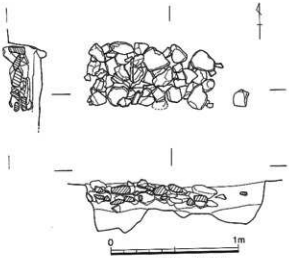
SK075と接合

集石遺構SX058　K25区に位置する集石遺構で、東西約1.0ｍ、南北0.6ｍの範囲に礫が分布する。集石を構成する礫は小型のものが主体であり、最大でも拳大の大きさものが数個存在しているに過ぎない。礫の出土状態からはこれらの分布状況が意図的なものではなく、整地層中に投げ込まれたものである可能性も考えられる。礫とともに銅銭が１枚出土した。出土遺物が僅少であるため、遺構の所産時期は不明である。

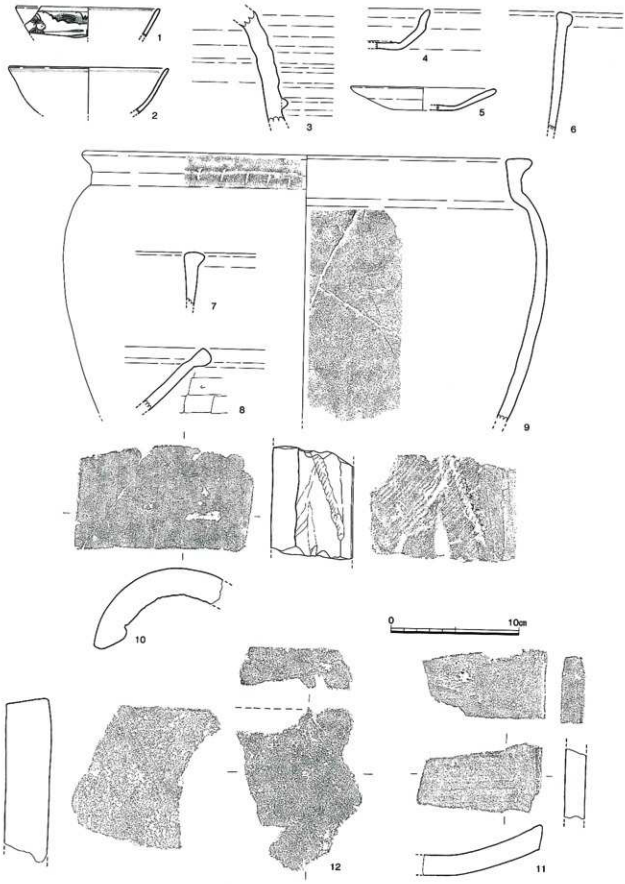
第333図　SX058出土遺物実測図（1/1）

SX058出土遺物（第333図）　図示した遺物は、中国北宋代の銅銭「元符通寶」で、初鋳造年は1098年である。

集石遺構SX070（第334図）　本調査区で「中層遺構面」と仮称している面で確認した遺物集中部である。上位の上層遺構面からもほぼ同じ位置で沢山の礫の分布が確認されていることから、本来上層遺構面から形成された集石遺構である可能性が高い。東西1.0ｍ、南北0.8ｍの範囲に頭大から拳大の礫が集積されており、土器・陶磁器なども一定量出土した。出土遺物の年代観から、16世紀末葉の所産と推定される。



第334図　SX070実測図（1/30）



第335図　SX070出土遺物実測図（1/3）

SX070出土遺物（第335図）　１・２は中国景徳鎮窯系青花碗で、小野分類E群に属する資料である。３は備前焼水屋甕の胴部破片で、胴部外面に貼付されている突帯が残存している。４・５は京都系土師器で、４は深手の坏、５は皿である。５の皿は薄手で古式のものであることから、混入品であろう。６～９は瓦質土器である。６・７は口縁端部外面を肥厚させ、突帯を有する火鉢、９は土鍋である。９は胴部から直立する口縁部をもち、三角形の突帯を貼り付けることによって口縁端部を肥厚させる形態を呈する火鉢である。口縁外面にはヘラ状工具による短線文を施している。10は丸瓦で、凹面に吊り紐痕が残存する。11は平瓦、12は塼である。

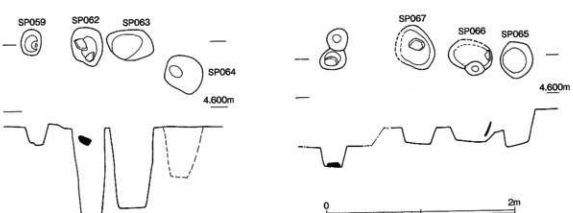
土坑SK069　K25区に位置する土坑で、上層遺構群で確認した遺構である。土坑の規模は南北1.2m、東西0.6m、深さ20cmである。周囲に存在する柱穴などを切って構築されている。遺構の性格は不明であるが、廃棄土坑であろうか。土坑の内部から図示可能な遺物は出土しておらず、土坑の詳細な年代は不明である。

土坑SK071　K25区に位置する土坑で、上層遺構群で確認した遺構である。遺構の平面形態は略円形を呈し、西側は工業用水管の構築によって破壊されている。その規模は南北1.2m、東西0.6m、深さ20cmである。出土遺物は認められず、遺構の詳細な時期・性格は不明である。

土坑SK075　調査区の南側、K26区に位置する土坑である。遺構の平面形態は隅丸方形を呈し、その規模は一辺1.3m、深さ20cmである。北西隅付近に構築された柱穴SP074に切られている。出土遺物の中で図示可能なものは認められず、土坑の詳細な年代は不明である。

町屋の区画

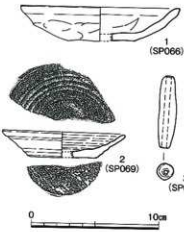
柱穴列SP059・SP062・SP063・SP064（第336図）　K26区に位置する柱穴列で、上層遺構群で確認した遺構である。柱穴列は４基で構成され、各柱穴の規模は径約30～40cm、深さは約70～80cmである。府内古図に見える「御内町」の町屋遺構に関わる横列等の区画遺構の一部で、短冊形地割りを形成する施設と推定される。隣接する第９次調査区でもこれらの柱穴列の延長部と思われる柱穴が検出されている。柱穴列を構成する柱穴については、互いが近接しており、同時存在とは思われないことから複数回の改修を考えるべきであろう。遺構の年代は16世紀末葉と推定されるが、柱穴内からは構築時期を示す良好な遺物は出土していない。



第336図　柱穴列実測図（1/40）

柱穴列SP065・SP066・SP067（第336図）　K25区に位置する柱穴列で、SP065～067およびSP067の西に位置する柱穴２基（遺構番号未設定）の合計５基で構成される。各柱穴の規模は径約20～40cm、深さは約20～40cmである。前項でふれたSP062～064で構成された柱穴列と同様、「御内町」の町屋関連遺構の区画の一部で、短冊形地割りを形成する施設と推定される。この柱穴列を構成する柱穴についても、互いが近接しており、同時存在とは思われることから複数回の改修を考えるべきであろう。遺構の年代は16世紀末葉と推定される。柱穴内からは、ロクロ目土師器や京都系土師器が出土しているが、遺構の年代よりは古相を呈する遺物である。

町屋の区画



第337図　柱穴列出土遺物実測図（1/3）

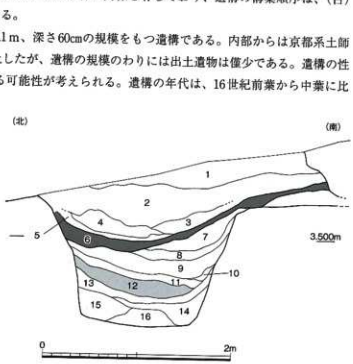
柱穴列出土遺物（第337図）　３はSP063出土の土錘で、完存品である。１はSP066出土の京都系土師器皿で、塩地編年２期の製品である。16世紀後葉頃の所産で、遺構の年代よりはやや古相を呈する遺物である。２はSP067出土のロクロ目土師器で、15世紀末から16世紀代の所産である。これも遺構の年代よりは古相を呈する遺物である。

土坑SK073・堀SD078　切り合い関係にある２基の遺構で、いずれもK25～K26区に位置している。その他、G25区に位置するSP072とも切り合い関係を有しており、遺構の構築順序は、（古）SD078→SK073→SP072（新）となる。

土坑SK073は東西3.6m、南北4.1m、深さ60cmの規模をもつ遺構である。内部からは京都系土師器やロクロ目土師器の皿が少数出土したが、遺構の規模のわりには出土遺物は僅少である。遺構の性格は不明であるが、廃棄土坑である可能性が考えられる。遺構の年代は、16世紀前葉から中葉に比定される。

堀SD078は幅2.2m、深さ1.2mの規模をもつ遺構で、本調査区で堀の屈曲部（コーナー）を確認した。しかしながら、南北方向の堀は短期間で埋没し、その後東西方向の堀のみが掘り返され、一定期間機能を続けたと推定される。堀の上面には黒褐色土が堆積し、その下位には大量の京都系土師器やロクロ目土師器皿が廃棄されていた（写真図版18参照）。出土遺物の中には少量の陶磁器片や砥石・鉄器などが含まれるものの、大半が土師質土器のカワラケ類であり、それも京都系土師器皿が主体を占める。SD078は隣接する第９次調査でも延長部が確認

京都系土師器の大量廃棄



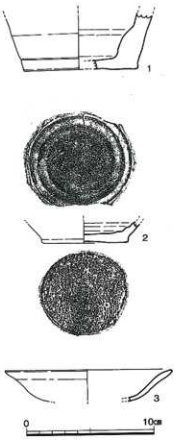
1　明褐色砂質土
2　灰褐色粘質土　3　灰褐色粘質土　4　褐色粘質土　5　灰褐色粘質土（2～5はSK073の埋土）
6　にぶい赤褐色粘質土（炭を多量に含む）　7　褐色粘質土
8　黒褐色粘質土　9　黒褐色粘質土　10　にぶい褐色粘質土　11　褐灰色粘質土
12　褐灰色粘質土（京都系土師器を大量に含む）
13　灰黄褐色粘質土　14　灰黄褐色粘質土　15　灰黄褐色粘質土　16灰色粘質土（6～16はSD078の埋土）

第338図　SK073・SD078土層実測図（1/40）

されており、第９次調査の所見でも、京都系土師器が大量に廃棄されていることや埋土上位に黒褐色土が堆積するなどの事象が判明している。また、第９次調査区では堀の東側の終息部も確認されている。出土遺物の京都系土師器は塩地編年１期に属する古相のものであり、これらが大量に廃棄されているということは、当該遺構が武家地（屋敷）に関連する区画遺構であることを強く想起させる。遺構の年代は、出土遺物の年代観から、16世紀前葉から中葉に比定されよう。

武家地に関連する区画遺構

SK073出土遺物（第339図）　１は瀬戸美濃産陶器瓶子の底部破片である。13～14世紀代の所産であることから、混入品であろう。２は在地系のロクロ目土師器皿で、色調は赤褐色を呈する。内外面にロクロによる整形痕が認められ、底部外面には回転糸切り痕が認められる。３は京都系土師器皿で、器壁の厚みが薄い塩地編年１期に分類される資料である。16世紀前葉から中葉の所産である。

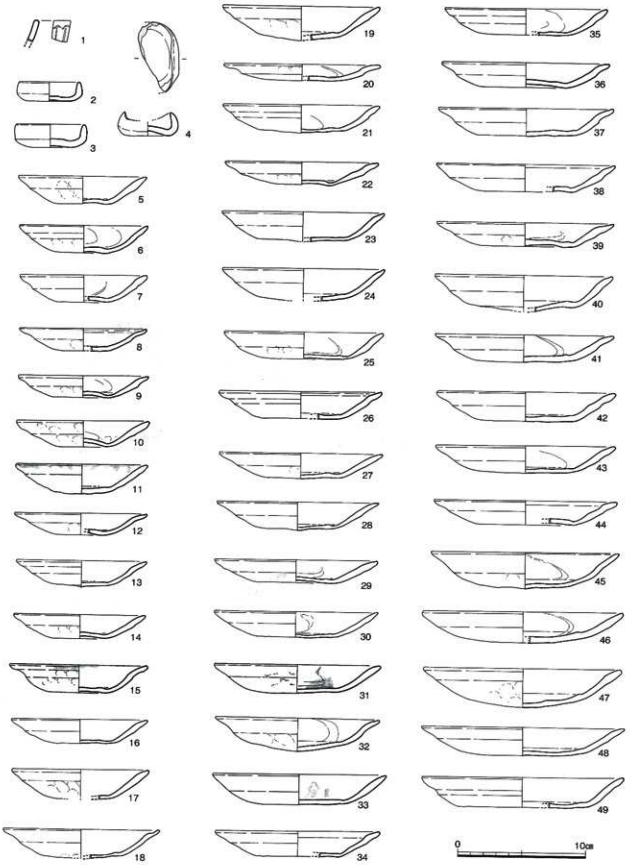


第339図　SK073出土遺物実測図（1/3）

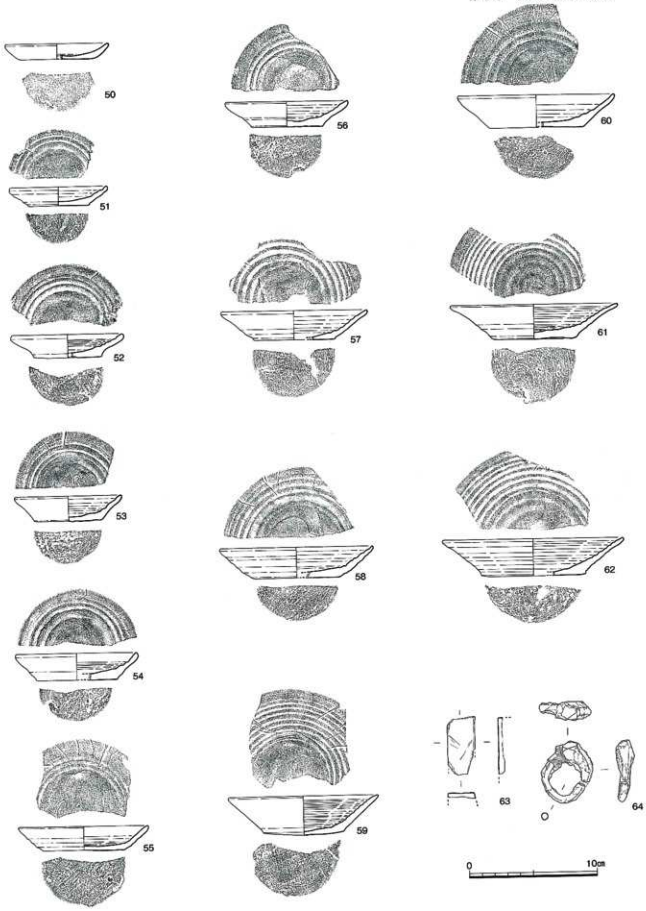
SD078出土遺物（第340・341図）　第340図１は中国龍泉窯系青磁で、細蓮弁文青磁碗の口縁部の小破片である。15世紀後半から16世紀代の所産である。２・３は京都系土師器の小皿あるいは蓋、４は耳皿である。５～49は京都系土師器皿で、色調は淡黄褐色を呈し、手捏ねによって整形される。器壁が薄く、いずれも塩地編年１期に分類される資料である。16世紀前葉から中葉に比定される。第341図50～62は在地系のロクロ目土師器皿で、色調は赤褐色を呈し、底部外面に回転糸切り痕が認められる。63は粘板岩を素材とする小型の砥石である。64はリング状を呈する鉄製品であるが、銹出が著しく、用途不明である。表面の一部に布が付着した痕跡が認められる。

京都系土師器皿

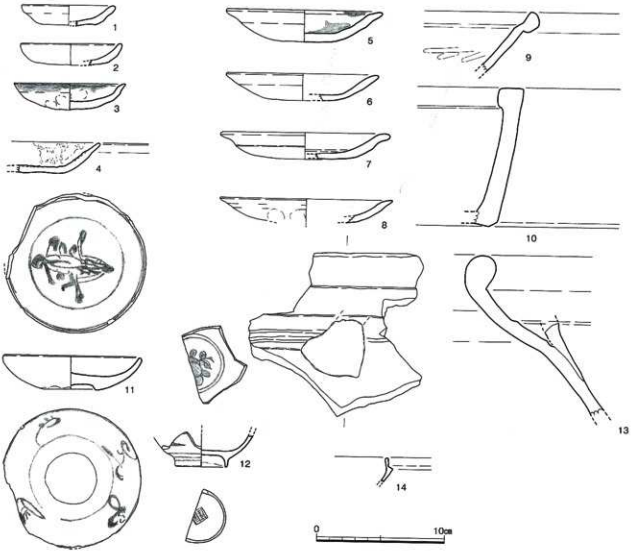
ロクロ目土師器皿



第340図　SD078出土遺物実測図①（1/3）



第 341 図　SD078 出土遺物実測図②（1/3）



第342図　K25・26区焼土層出土遺物実測図（1/3）

天正14年(1586)島津侵攻時の焼土層

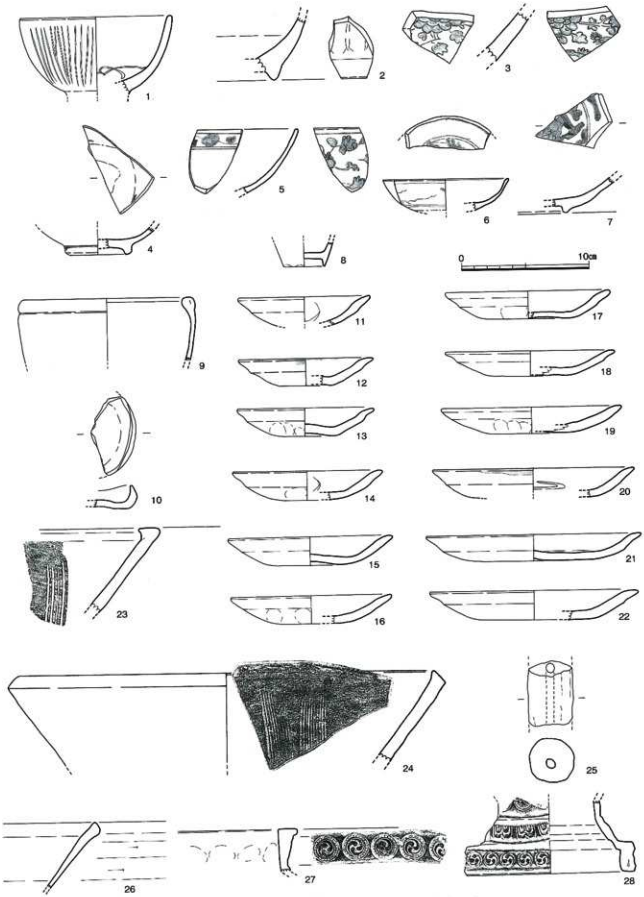
K25・26区焼土層　上層遺構群で確認された焼土層である。K25・26区で検出され、分布範囲は東西2.0m、南北0.9mを測る。焼土層中からはほぼ完形の漳州窯系青花皿をはじめ、タイ産のメナムノイ窯系四耳壺や京都系土師器などが出土した。焼土層の形成時期は、出土遺物の年代観から16世紀末葉に比定され、天正14年（1586）の島津侵攻時がその契機になったと想定する。

メナムノイ窯系四耳壺

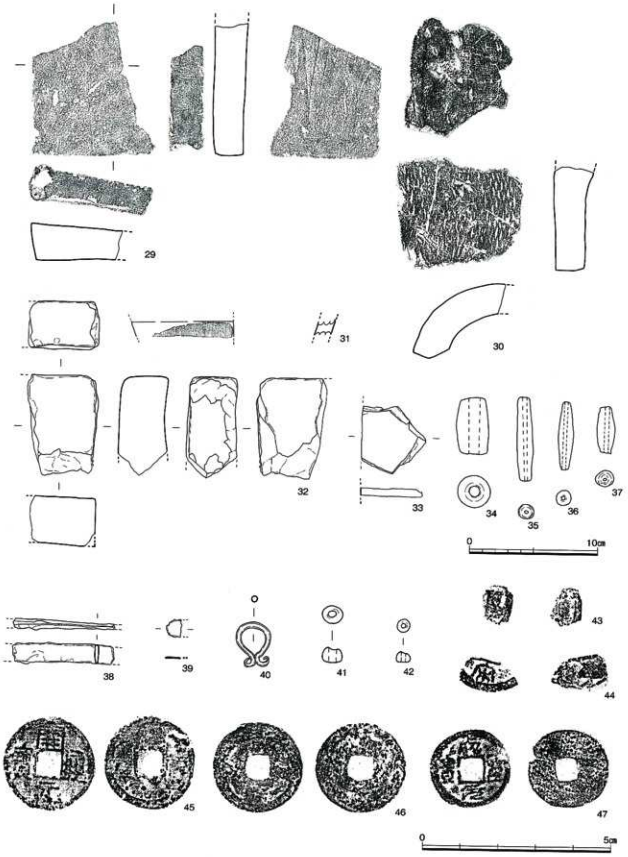
焼土層出土遺物（第342図）　1～8は京都系土師器皿である。塩地編年1期と2期以降の製品が認められ、4については内面に金属滓が付着している。4は器壁の厚みが薄く、塩地編年1期に位置づけられる古相の資料であることから、混入品であろう。9・10は瓦質土器で、9は土鍋、10は火鉢である。11は中国漳州窯系青花皿で、見込みには「壽」字が描かれている。12は中国景徳鎮窯系青花碗で、小野分類E群に分類される資料である。内底部の銘款は異体字である。13はタイ産のメナムノイ窯系四耳壺である。14は合子の口縁部で、胴部外面に黄褐色を呈する鉄釉を呈し、口縁部内外面と胴部内面は露胎となる。

K25区の出土遺物

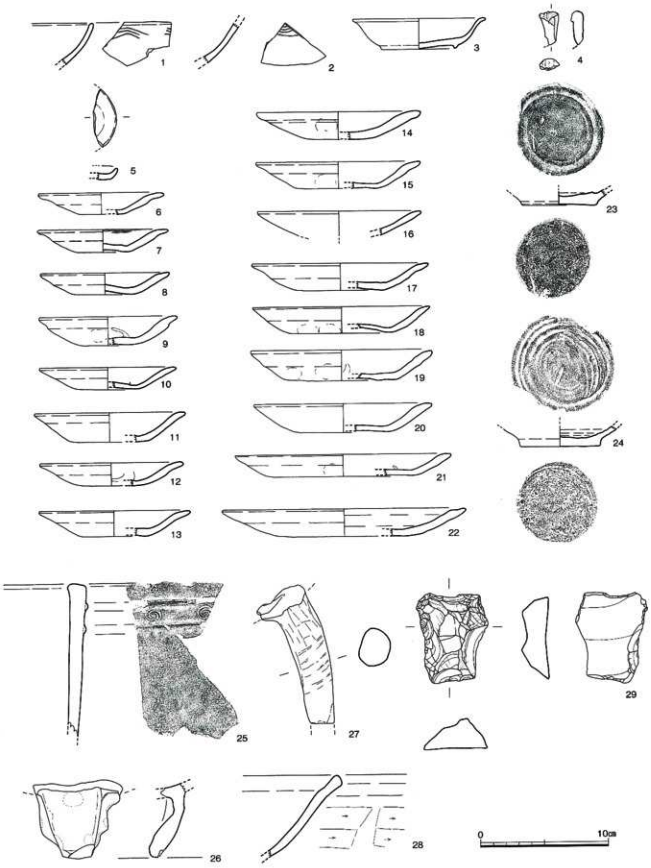
包含層・整地層出土遺物（第343～345図）　第343・345図はK25区からの出土遺物である。第343図1・2は中国龍泉系青磁で、1は細蓮弁文青磁碗、2は外面に鎬蓮弁文を有する大皿（盤）である。3



第343図　包含層・整地層出土遺物実測図①（1/3）

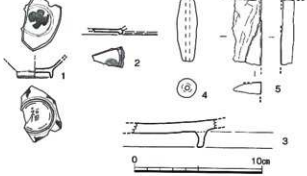


第344図　包含層・整地層出土遺物実測図②（1/3・1/1）



第345図　包含層・整地層出土遺物実測図③（1/3）

は中国景徳鎮窯系五彩で、大皿（盤）の胴部破片と思われる。４は中国漳州窯系青花碗で、見込みが蛇ノ目釉剥ぎとなる。５は中国景徳鎮窯系青花碗で、小野分類Ｅ群碗に分類される資料である。６・７は中国景徳鎮窯系青花皿で、小野分類Ｅ群皿である。８は中国景徳鎮窯系白磁小杯で、森田分類Ｅ群に属する。９は中国南部産焼締陶器鉢で、吉田分類Ｂ類に分類される。10は耳皿で、色調や胎土は京都系土師器のそれと類似する。11～22は京都系土師器皿である。23は瓦質土器擂鉢で、口縁部の形態から、防長系に分類される製品である。24は備前焼擂鉢で、乗岡編年中世３期に比定される。14世紀末葉から15世紀前葉の所産である。25は土師質土器の用途不明の製品である。断面中央に貫通孔を有する。26は在地系と推定される瓦質土器土鍋の口縁部である。外面に削り、内面にナデが施される。27は瓦質土器の壺または風炉の口縁部で、外面に巴文の刻印を押捺する。15世紀代の製品であろうか。28は瓦質土器の脚部で、外面に運弁文・巴文などの刻印を押捺する。花瓶または風炉などの脚部である可能性が高い。第344図29は埴、30は丸瓦である。31は滑石製品の破片である。小破片のため、本来の形態は不明であるが、石鍋などの一部であった可能性がある。32・33は砥石で、32は砂岩、33は粘板岩を素材とする。34～37は土錘である。38～40は金属製品で、38は銅製の小柄である。39は銅を地金とし、鍍金を施す金属製品であるが、小片のため用途不明である。40は銅製の部品であるが、これも用途不明である。41・42はガラス玉、43～47は銅銭である。なお、銅銭の銭種・初鋳造年については、巻末の遺物一覧表を参照されたい。



第346図　包含層・整地層出土遺物実測図④（1/3）

K26区の出土遺物

第345図はK26区からの出土遺物である。1・2は中国産の青磁碗で、口縁部外面に櫛状工具によって波状文が描かれている。3は中国景徳鎮窯系白磁皿で、森田分類Ｅ群の製品である。4は中国産の白磁で、小破片であるが、獅子形置物の一部（前足の部分）である可能性が高い資料である。5は土師質土器の耳皿で、色調や胎土は京都系土師器のそれと類似する。6～22は京都系土師器皿である。23・24は在地系のロクロ目土師器で、色調は赤褐色を呈し、底部外面には回転糸切り痕が認められる。25は瓦質土器の火鉢で、口縁部外面に２条の突帯をもち、突帯間に巴文の刻印を押捺する。26は瓦質土器火鉢の脚部である。27は足鍋の脚部と思われ、防長地域に分布する足鍋と類似する形態を呈する。28は瓦質土器土鍋である。29は姫島産黒曜石の石核である。縄文時代あるいは弥生時代の所産の混入品である可能性があるが、火打ち石として使用された戦国時代の遺物である可能性も考えられる資料である。

白磁獅子形置物

K26区撹乱部分からの出土遺物

第346図は調査区南側に位置するK26区撹乱部分からの出土遺物である。1は中国景徳鎮窯系青花小杯で、外底部に「福」字の裏底銘をもつ。2は中国産陶器の青釉小皿である。底部の破片で、内面と高台部外面および外底部の一部に施釉が認められる。3は在地系の瓦質土器鉢で、高台部の破片である。4は土錘、5は輝緑凝灰岩を素材とする砥石で、砥の二次転用が考えられる製品である。

（３）小結

堀 SD078

第67次調査B区で最も注目すべき遺構は、堀SD078である。SD078は幅2.2m、深さ1.2mの規模を有し、埋土上位には多量の炭化物を含む黒褐色粘質土が堆積していた。当該層位からは、京都系土師器皿を主体とした大量のカワラケが出土した。京都系土師器は大友府内町跡からの出土遺物としては、器壁が薄い古式の資料であり、塩地編年１期の16世紀前葉から中葉に比定される資料である。第67次調査B区では堀のコーナーも検出され、堀が南方向に逆L字状に屈していたことが明らかになった。東側の延長部は平成12～13年度に調査を実施した第９次調査Ⅰ・Ⅳ区[11]で検出されており（９次Ⅰ・Ⅳ区SD01、長さ16.5mを確認）、特に９次調査Ⅰ区では堀の終息部を検出している。この終息部の東側は、堀の陸橋部、すなわち「出入口」に相当する可性があるが、発掘調査区の制限から確認が取れていない。このようにSD078は逆L字状に屈曲することや遺構埋土から大量のカワラケが出土することから、武家屋敷の区画の堀である可能性が高い。カワラケが大量に出土するのは67次調査B区に集中しており、９次調査区では出土遺物が僅少であることから、堀のコーナー付近に集中してカワラケの廃棄が行われていることがわかる。

堀のコーナーから大量の京都系土師器が出土

武家屋敷の区画の堀

第347図　第67次調査B区周辺の主要遺構（16世紀前葉～中葉）（1/400）

第67次調査Ｂ区の周辺で、16世紀前葉から中葉、すなわち塩地編年１期の京都系土師器を出土する遺構に着目してみたい（第347図）。第52次調査では５基の土坑（SK025・SK030・SK031・SK032・SK033）がある。これらの土坑の出土遺物は数量が少ないものの、やはり京都系土師器が主体となり、陶磁器や他の土器製品を含まない。同様な出土遺物の組成をもつ土坑は、第67次調査Ｃ区SK207・SK208、第78次調査SK003でも確認されている。また、67次調査Ｃ区SK118は100個体以上の京都系土師器皿が一括廃棄された土坑である。これらの「カワラケ廃棄土坑」ともいえる特異な遺構の存在は、これらの遺構が分布する場所が何らかの儀礼空間として機能していたことを物語る。また、第79次調査SD040は小型の溝であるが、埋土中に京都系土師器が細かく破砕された状態で出土した。この遺構から出土した京都系土師器も何らかの儀礼に使用された後に、溝内に廃棄された遺物であろう。

「カワラケ廃棄土坑」

また、第67次調査Ｃ区・第78次調査では、小鍛冶に関連した遺構も確認されている。67次調査Ｃ区SX188は小鍛冶の炉跡そのものであるし、78次調査SX006～SX008は鍛冶に関連した空間もしくは廃棄土坑であった可能性が高い。これらの小鍛冶関連遺構の周辺にカワラケ廃棄土坑が構築されていることにも注目しておきたい。

小鍛冶関連遺構

上記のように、16世紀前葉から中葉の段階では、調査区周辺が武家地の屋敷空間であり、同時に小鍛冶関連の遺構も重複して構築されていることを指摘した。調査区の制限もあり、当該段階での屋敷構造は明らかになっていないが、これらの遺構の分布から、武家屋敷の住人が屋敷内で工人等を招聘し、小鍛冶の生産を行っていたことが想定される。

第67次調査Ｂ区の周辺が（武家）屋敷地の空間として使用されていたことは、その後16世後葉の古い段階まで継続するようである。第52次調査では16世紀後葉に堀SD060・SD070が削され、これらの溝も逆Ｌ字状に屈曲する。当該遺構も武家地の屋敷空間を区画する堀と推定される。しかし、16世紀末葉（1570年代頃）になると、屋敷空間の一部を覆って第２南北街路が構築され、屋敷空間の大部分は「街路」と「町屋」を構成する空間に転換するという、大きな画期を迎えることになるのである。

註(1)　大分県教育庁埋蔵文化財センター『豊後府内２　中世大友府内町跡第９次・第13次・第21次調査区』（一般国道古国府拡幅事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（１）　大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告第２集　2005年）